

学術論文

ロンドンにおけるソマリ国民運動
(Somali National Movement) の展開

須 永 修 枝

富山大学人文科学研究第 79 号抜刷

2023年8月

ロンドンにおけるソマリ国民運動 (Somali National Movement) の展開

須 永 修 枝

はじめに

出身国を離れ、他国で暮らす人びとは国境を越えて出身国の政治に関与しており、その影響力は看過できるものではない。最近の例では、2021年2月に発生したミャンマーでの軍事クーデターに対し、世界各地で暮らすミャンマー人たちが政権を掌握した軍事政権への抗議活動を行っている。日本に居住するミャンマー人たちによる抗議活動を考察した高松 [2022] は、世界各地のミャンマー人たちを重要な政治的アクターと位置づけている。国外で暮らすミャンマー人たちが対話を拒む国軍に対して直接的に影響を及ぼす可能性は低いものの、世界各地のミャンマー人たちが居住国政府や国際機関に働きかけることで各国、機関による国軍への対応は変化する可能性がある [高松 2022]。

さらに、ロシアのウクライナ侵攻によりNATO加盟を申請したスウェーデンとフィンランドに対し、トルコが加盟に反対している理由にはスウェーデンのクルド人による活動がある。能勢 [2022] によると、スウェーデンに居住するクルド人たちの活動はクルド・ナショナリズムや人権運動の面で影響力が大きく、これまでもエルドアン大統領は彼らを警戒してきた。もはや、他国に居住する人びとは出身国の政治や外交に影響を与える政治的アクターとして看過できない存在である。

本稿で取り上げるソマリ国民運動 (Somali National Movement : SNM) は1981年4月にロンドンで発足した。SNMは彼らの出身国であるソマリアに大きな影響を及ぼし、1991年5月のソマリランドの独立宣言にまで至った¹⁾。サウジアラビアとイギリスに居住していたソマリ人たちが、当時のソマリア大統領であるシアード・バーレへの反対勢力を形成しようと話し合うなかで1981年にロンドンで発足したSNMは、トランスナショナルに展開した政治的アクターであった。SNMは、ソマリ人がロンドンで行った初めての政治活動であり [Griffiths 1999]、ソマリランド建国のプロセスを論じる際に必ず言及される存在である。

しかし、そもそもSNMがいかなる人びとによってどのように展開されたのかは必ずしも明らかではない。下記で論じるように、SNMを発足させた人びとはSNMとしての活動を目的に

1) ソマリランドは紅海に面し、ジブチとエチオピアに隣接している。ソマリランドは現在に至るまで主権国家としては承認されていないものの、ソマリアとは別に独自の国家運営を行っている。

サウジアラビアやイギリスで暮らすようになったのでもなければ、そもそもソマリランドの建国を目指していたわけでもない。あくまでも、取り巻く環境に人びとが対応し続けた結果としてSNMは始められ、最終的にソマリランドの建国を宣言するに至ったのである。

出身国を離れて他国に居住する人びとは重要な政治的アクターである。しかし、上記のミャンマー人にしてもクルド人にしても、そもそもいかなる人びとが政治的活動を始め、どのように支持を得たのかを考察しなければ、他国に居住するすべてのミャンマー人やクルド人を一面的かつ同質的に捉えるという問題に直面する。この問題に陥ることなく、彼らを重要な政治的アクターとして位置づけるためには、その活動のプロセスを考察する必要がある。本稿は、ソマリランドの建国を担った存在として論じられるSNMの活動が、どのような背景を持つ人々によって、なぜ始められ、いかにして人びとの支持を得るようになったのかを、SNMの発足過程から活動に関与していた男性への聞き取り結果をもとに考察する。この男性は、ソマリランド独立後はロンドンのSNM事務局を引き継いで設置された「在英ソマリランド大使館 (Somaliland Mission UK)」の代表に就任した人物である。本稿は男性への聞き取り結果をもとに、SNM発足前の1970年代末からソマリランドの独立が宣言された1991年に至るまで、出身国および居住国の状況に応じてSNMが展開していったプロセスを明らかにする。

先行研究

出身国を離れて他国に居住する人びとに対しては、学術論文だけではなく、政策文書などでも一般にディアスポラ (diaspora) という言葉が用いられるようになってきている。人びとが出身国を離れる理由は政治的なものや経済的なものなど様ではないが、他国に居住しているということのみを共通点として、彼らはディアスポラと呼ばれる傾向がある²⁾。

例えば、国際移住機関 (IOM) は移民 (migrants) という言葉のみでなく、ディアスポラという用語も用いている。IOMは移民やディアスポラとされる人びとと彼らの出身国との繋がりに着目し、彼らの出身国の開発を促進させようとしてきた。ソマリアでも2008年からThe Migration for Development in Africa (MIDA) というプロジェクトが行われてきた³⁾。「専門的な知識を持つディアスポラ (qualified diaspora professionals)」を雇用することでソマリアの開発を促進することを目的とし、これまで419人の「ディアスポラ専門家 (diaspora professionals)」が雇用されてきた (IOM MIDA Somalia ウェブサイト)。ディアスポラは国際機関から開発を

2) ディアスポラという言葉が広く用いられることによる問題についてはBrubaker [2005] を参照のこと。
なお、本稿は人びとがソマリランドのディアスポラとして活動するようになるプロセスを考察することが重要であるという立場で議論を展開している。

3) MIDAはソマリランドでも行われているが、ソマリランドは国際的には主権国家ソマリアの一部であるため、ソマリランドでの事業はMIDA Somaliaのなかに含まれている。

担う重要なアクターとして位置づけられている。

他方で、学術的にもディアスポラがソマリア／ソマリランド⁴⁾との繋がりを維持していることは注目されてきたが、それが彼らの出身地域に良い効果を及ぼすのかは必ずしも自明ではない⁵⁾。ディアスポラが出身国の開発や平和を促進するのか、それとも紛争を助長するのかを巡っては、ソマリア／ソマリランドに限らず、広く2000年代以降に論じられるようになった問題である。Smith and Stares [2007] による論文集 *Diasporas in Conflict: Peace-makers or Peace-Wreckers?* では、ディアスポラは平和を促進することもあれば壊すこともあると結論づけられている。この議論を踏まえ、2018年には *Journal of Ethnic and Migration Studies* で特集が組まれ、ディアスポラの行動を分析する際に、彼らを取り巻く環境に着目する必要性が主張された。この特集号の序論を執筆したKoinova [2018] は、様々な異なる文脈に同時的または異時的に関わりを持ち、それらの文脈がディアスポラの行動に影響を与えていると論じた。ディアスポラは根無し草のような個人やグループ、ネットワークではなく、文脈に埋め込まれており、彼らが埋め込まれた文脈によって彼らの活動は形づけられる [Koinova 2018]。本稿はこの議論を踏まえ、ディアスポラの行動が彼らを取り巻く環境や埋め込まれている文脈から影響を受けるという点に着目しながら、SNMの発足に至る過程とその後の展開を考察する。これまで、ソマリア／ソマリランドのディアスポラについて、彼らが出身国に及ぼす効果が論じられてきたのに対し、本稿はそもそも彼らの行動がいかなる過程を経て生じたものなのかを明らかにすることを試みる。

また、SNMについて人びとを取り巻く環境に着目した分析をすることは、学術および政策の双方で未だに影響力を持っている原初主義的な議論への挑戦を意味する。ソマリア／ソマリランドを対象とするほとんどの議論が、まずはソマリ人社会のクラン系図を説明しており、そこではあたかもソマリ人社会にクランが存在するからこそ、人びとは分裂し争いが絶えないかのように論じられる傾向がある⁶⁾。I.M. Lewisが1961年の著書 *A Pastoral Democracy* でソマリ人社会はクラン関係に規定されていると論じて以降、現在まで原初主義的な考え方はソマリア／

4) ソマリランドはソマリアの一部として取り上げられることもあれば、ソマリランド単体で論じられることもある。ここでは、それら全ての議論を対象としていることを意味している。

5) ソマリア／ソマリランドのディアスポラは主に送金によって出身地の家族と繋がっていることや、開発事業、政治に関わっていることが論じられてきた [Hammond 2011; Horst 2004; 2008; Lindley 2009a; 2009b; UNDP 2009; 2011]。また、彼らが居住地と出身地を行き来していることも注目されてきた [Hammond 2013; Hansen 2007]。なお、ソマリランドについては、最近ではRock [2021] が国家建設へのディアスポラの影響を論じている。

6) ソマリランドの歴史を論じているPrunier [2021] も、ソマリアに関する議論のほとんどが序論でクランを扱っており、それらは「興味深いものから表面的なもの」(p.2)に分かれていると述べている。本稿が問題にしているのは、ひとまずクランを説明している表面的な議論である。

ソマリランド研究および政策面でも影響力を持っている。

しかし、ここで注意すべきことはクランを取り上げる際にもっぱら言及される Lewis は、クランの存在を議論の中心に据えているものの、クランが存在するからこそ人びとが互いに対立するとは論じていないことである。確かに、Lewis は 1994 年の著書 *Blood and Bone: The Call of Kinship in Somali Society* で、ソマリ人社会におけるクランの存在を絶対的なものとして位置づけている。しかし、この著作でも Lewis はクランの存在を対立や紛争の根源とは捉えていない。

この著書の第 8 章 “The Rise of the Somali National Movement: A Case Study in Clan Politics” では SNM が取り上げられている。その際、本文中には次のような記述がある。

ソマリ人のクランを基盤とした組織は、敵対的な外的圧力への対応であり、クランの利益を守り、追求しようとするものである。SNM ははじめからリアクティブなソマリ人のクランを基盤とした組織の典型だったのである⁷⁾。(180 頁)

この記述には、Lewis がソマリ人のクランを基盤とした行動を、あくまでも周囲の環境への「リアクティブな」ものとして捉えていることが表れている。この考え方は、SNM の展開について彼らを取り巻く環境や埋め込まれた文脈に着目しながら、活動を始めた人びとの背景やきっかけ、支持のされかたを論じる本稿とも共通する。確かに、Lewis の議論はやや混乱する部分もあるがゆえに、原初主義的なソマリ人社会の捉え方を後押しする部分もあるが、本稿は Lewis の議論が環境や文脈を重視しており、本稿の主張を支えるものとして位置づける。

なお、Lewis [1994] には SNM をリードしてきた人物らの名前が記載されているものの、人びとの背景については僅かに「エンジニアでビジネスマン」や「有名な人物」と紹介されているのみで、それ以上の情報は記載されていない。また、SNM がソマリア国外に居住していた知識人たちによって始められたと論じられることもあるが [Bradbury 2008]、やはり具体的な人物像について示されることはない。そこで、本稿では筆者がロンドンで行った SNM の設立に携わった男性への聞き取り結果を基に、SNM をリードしてきた人物の背景および活動に至った経緯、活動の展開を考察する。この男性は、SNM を論じている上記の Lewis [1994] でも、その名が示されている人物である。

男性への聞き取りは 2015 年から 2016 年の調査で計 4 回実施した。80 代後半であったこの男性は、平日の日中はロンドン東部にある引退したソマリ人男性たちが昼食のために集まるセンターで過ごしていたため、聞き取りはそのロビーで実施した。聞き取りは英語で行い、その内容は

7) 原文は次の通り。“The SNM was thus, from the beginning, a typical reactive Somali clan-based organization responding to hostile external pressures and seeking to protect and forward clan interest.”

すべて録音し、文字起こしをした。SNMを始めた人びとについての具体的な記述がほとんど存在しないなか、活動をリードした人物の背景や経緯、当時の状況のとらえ方を示し、考察すること自体が他にはない試みである。それゆえ、本稿はSNMをめぐる議論を深化させることになろう。

ソマリ人が移住した背景

現在、国連が承認している主権国家としてのソマリアは、旧イギリス保護領と旧イタリア植民地が1960年に連合を形成したことで発足した⁸⁾。連合を形成するプロセスから、旧イタリア領が主導権を握っていたが、問題はソマリア独立後に悪化した。ソマリアの首都は旧イタリア領に位置するモガディシオに置かれ、ソマリア議会は旧イタリア領出身者が多くを占め、行政や高等教育機関はモガディシオに集中した。そのため、連合を形成した当初から、ソマリアの北部に位置する旧イギリス保護領は周辺的な位置づけとなった [Bradbury 2008; Lewis 1994; 2002]。そして、ソマリア北部の周辺化は、1969年の無血クーデターによりソマリア大統領に就任した旧イタリア領出身のシアード・バーレによって次第に加速し、顕著になっていった⁹⁾。

ソマリア北部となった旧イギリス領が政治的にも経済的にも周辺化されていたなか、1970年代には湾岸諸国でオイルブームとなり多くのソマリ人男性が湾岸諸国へ出稼ぎに行くようになった [Lewis 1994]。とくに、1973年から1974年にかけてソマリアで発生した旱魃で多くの人びとが家畜を失うと、地域で働き口を得られなかった彼らは湾岸諸国、とりわけサウジアラビアへ出稼ぎに行った [UNDP 2009]。さらに、ソマリアが1977年から1978年のエチオピアとのオガデン戦争に敗れると、バーレはエチオピアから逃れてきたオガデン難民に対し北部地域の土地を提供した¹⁰⁾。これにより、北部地域の人びとの周辺化や抑圧が加速し、彼らは湾岸諸国に逃れた。統計資料は乏しいが、1980年代には湾岸諸国に20万から30万人のソマリ人が暮

8) 旧イギリス保護領は1960年6月26日に独立をし、その五日後である7月1日に旧イタリア領と合併した。しかし、この合併について、正式な国際条約は締結されていない。ソマリア南部が主導して合併が行われたため、ソマリア北部(旧イギリス領)の人びとはそれに対して不満を抱えていた [Bradbury 2008]。

9) バーレは1969年のクーデターにより政権を奪取した。ソマリアでは、1960年代後半から議会政治が機能不全に陥っていたこともあり、バーレによるクーデターは必ずしも非難の対象にはならず、議会政治に失望していた人びとはバーレ政権の誕生を歓迎した。バーレは1971年には「反部族主義キャンペーン」を行い、クランに関する全ての行為を違法とした [Bradbury 2008]。しかし、バーレはオガデン戦争でエチオピアに敗北して以降、むしろクランを利用した政治を行うようになり、とくに北部のイサククを対象に抑圧を強めていった。

10) エチオピアのオガデン地域にはソマリ人が居住している。彼らのクランはオガデンである。オガデンはバーレと同じダロッドというクランファミリーに属している。オガデン戦争は、本論で触れる大ソマリ主義を実現する一手段であり、当初はソマリア北部の人びとも戦争を支持していた [Bradbury 2008]。

らしていたという見込みもあり [Kleist and Abdi 2021], その大半を北部出身者が占めていたと考えられている [Lewis 1994]。また, 湾岸諸国には世俗教育を受けたソマリ人の知識人たちも移住していた [Fagioli-Ndlovu 2015]。しかし, 湾岸戦争によって湾岸諸国での仕事が減少し, さらにソマリアの政治状況が悪化すると¹¹⁾, 湾岸諸国で暮らしていたソマリ人は仕事や庇護を求めてヨーロッパに移動するようになった [UNDP 2009]。

ヨーロッパ, とりわけイギリスには植民地時代からソマリ人が居住していた。1880年代にソマリ人の居住地が植民地政策の対象となると, ソマリ人男性はイタリア軍やイギリス軍に従事し, アフリカ大陸の外で活動した。イギリス保護領では, ソマリ人男性が船員として雇用されたため, ソマリ人はイギリスの船渠があるカーディフやリバプール, ロンドン東部などに滞在するようになった。1960年にソマリアが独立して以降は, 人びとは仕事や留学のためにイギリスに滞在するようになり, 極めて限られた数であるが家族を呼び寄せるようにもなった。しかし, 1980年代までイギリスのソマリ人の数は極めて限定的であり, ロンドン東部などにソマリア北部出身の少数の人びとが生活しているに過ぎなかった [Fagioli-Ndlovu 2015]。以下で示す男性の経験は, まさにこの時代背景に沿ったものであったと言える。

SNM 設立に携わった男性の背景と経緯

上記のように, これまでSNMを始めた人物については, 単に人物名のみであったり, 知識人やエリートという括りで示されたりするのみで個人の具体的な背景や経緯は明らかではなかった。以下では, 筆者がロンドンで男性に聞き取りをした結果をもとに, 具体的に背景や経緯を示す。

聞き取りをした男性は, 1930年代に父親の仕事によりイエメンのアデンで暮らしていた。男性の父親は船に乗る客を港から船まで輸送する仕事に就いていた。男性はアデンでローマ教会系の私立学校に通っていた。そこで宗教は教えられることはなく, 学生の9割はアラブ人のイスラーム教徒だったという。1940年代に男性はソマリランドに戻り, 事務官 (clerk) として働き始めた。その当時, ソマリ人が就くことができる最上位の仕事が事務官だったと男性は話した。男性は事務官のなかの最底辺の役職から始め, 試験を毎年受けながらキャリアを積ん

11) ソマリア北部での紛争は1988年に激化した。紛争は次第にソマリア南部にも広がり, バーレは1991年に首都モガディシオから脱出した。その後, ソマリア南部では和平合意が繰り返し試みられる状態が継続した。2012年には21年ぶりに統一政府が樹立され, 国際社会も支援しているが, 現在も安定した統治には至っていない。

だという¹²⁾。イギリスは1950年代になると、ソマリ人に行政を任せするために彼らに世俗教育をするようになり、この男性はスーダンやイギリスに派遣された。その際、この男性はイギリスに三年間ほど滞在した。この男性は1959年にソマリランドに戻ってディストリクトコミッショナーとして働き、1960年にイギリスがソマリランドから去る際にソマリランド総督 (Governor of Somaliland) に任命された。ソマリ人として総督になったのは、この男性が初めてだったという。

1960年にソマリランドが旧イタリア領と連合を形成し、ソマリアの一部になった際、男性は行政官だったため政治的な活動をする事はなかったが、この男性はソマリアとしての独立を支持していた。男性はソマリアが発足する以前、旧イタリア領との繋がりはないが、大ソマリ主義 (Greater Somalia)¹³⁾の一部として旧イギリス領と旧イタリア領の連合形成を捉え、支持した。当時、全てのソマリ人がソマリアの発足を支持したと男性は語った。

ソマリアの独立後、1961年に男性は旧イタリア領に置かれた首都、モガディシオに初めて行き、外務省で働き始めた。1962年から1968年まではフランスやロシアのソマリア大使館で大使を務め、ソマリアに帰国後は保健省 (Ministry of Health) で働き始めた。保健省では外務省で言うところの大使と同じランクの役職に就任した。しかし、1975年にバーレが60人の行政官を一斉に解雇したことを受け、この男性はソマリアを去り、仕事を求めてサウジアラビアへ向かった。男性はサウジアラビアで働いた後、イギリスで庇護申請をした。男性はその当時の状況を次のように話した。

シアード・バーレ政権は上級公務員や大使、長官、自治組織の長などの60人を解雇しました。私たちは革命の精神とは共に進めなくなり、1975年に退職しました。私は他の人びとと同じように仕事を求めてサウジアラビアに行きました。… (中略) …私は二つの会社で働きました。私営企業ともう一つはトヨタに卸す会社です。私は1979年から1985年まで働きました。1985年にその会社は75%の職員を解雇しました。私は当時、管理部長でした。私は再び無職になりました。そして、私は庇護申請をするためにイギリスに来ました。庇護申請は幸運にも認められました。

12) イギリスのソマリランド保護領は、インドなどのアジア圏との貿易ルートの安全性を確保するために1839年に設置されたアデンの基地に食肉を供給することが主な役割であった。そのため、イギリスはソマリランドを開発する意向はなく、1947年にインドが独立するとソマリランドの政策的価値は消滅した。そのため、イギリスはソマリランドの維持費を軽減するために現地の人々を教育し、行政官として雇用することとし、これを契機にソマリランドではソマリ人に世俗教育が行われるようになった [Bradbury 2008; Lewis 2002; Millman 2014]。

13) ソマリ人はソマリア (旧イタリア領)、ソマリランド (旧イギリス領) のみではなく、エチオピアのオガデン地域、ジブチ、ケニアの北部にも居住している。1960年の独立当初から、ソマリアの国旗は青地に白抜き星が記されており、その星はこれら五つのソマリ人居住地域の統一を意味している。

SNMの活動を始動したこの男性の教育レベルおよび行政官としてのキャリアは非常に高い。男性は、ソマリ人が世俗教育を受けることがほぼなかった時代にアデンで教育を受け、ソマリランド帰国後はイギリス植民地政府の政策により行政官に必要な教育を受け、ソマリ人として初めて総督に就任するに至った。筆者がロンドンで調査をしている際に、他のソマリ人にこの男性に会ったことを伝えると、年配のソマリ人男性は「この男性を知らない人はいない」と言うことがしばしばあったことから、この男性は特別な存在であると考えられる。この男性の教育レベルや職業経験は際立っているのである。

また、この男性がバーレ政権のイデオロギーに反対して職を辞し、新たな仕事を求めてサウジアラビアに向かったと述べたように、SNMを立ち上げた男性たちはバーレ政権への反対運動をするために他国に向かったのではない。確かに、この男性はバーレ政権に反対していたものの、政治活動をするためにサウジアラビアに移住したのではない。ましてや、後に述べるようにサウジアラビアでは政治活動は禁止されていたのである。あくまでも、この男性は仕事を求めてサウジアラビアに移住したのである。上記のように、この当時のサウジアラビアはオイルブームの只中であり、多くのソマリ人が仕事を求めてサウジアラビアに向かった。男性の行動は、当時のソマリアの政治情勢および湾岸諸国でのオイルブームという環境から影響を受けたものであったのである。

サウジアラビアとイギリスの状況

1975年に保健省を退職し、仕事を求めてサウジアラビアに渡ったこの男性は、いかなる経緯でバーレ政権への反対勢力の形成について考え、行動するようになったのだろうか。SNMの発足に結び付く行動に至った経緯について、男性は1978年にソマリアがエチオピアとのオガデン戦争に敗れた後、男性の出身地である北部地域に対してバーレ政権が抑圧を強めたためだと話した。

1977年にソマリアはエチオピアのオガデンに侵攻しました。それに敗れた後、ソマリア軍はソマリアの特定のクランに対し攻撃をしました。そのクランとはイサックです。イサックの大半はソマリランドに住んでいます。当時、多くの人びとが仕事を求めてサウジアラビアやUAEに行きました。そのなかには、知識人や政府に解雇された上級公務員などもいました。サウジアラビアに行った私たちは、「反対勢力をつくろうではないか」となりました。このように反対勢力は作られました。その時、その活動には名前がなく、私たちは個人として集まっていました。公的な組織はありませんでした。サウジアラビアでは政治組織を作ることが許されていなかったからです。私たちは全員が男性でした。サウジアラビアでは政治組織を作ることが許可されていなかったため、私たちはロンドンに派遣団

を送りました。この組織は「ソマリランド国民運動」と名付けられました。ロンドンでは組織を立ち上げることが許されていなかったので¹⁴⁾。

上述のように、ソマリアで発生した1973年～1974年の旱魃によって多くのソマリ人がサウジアラビアに出稼ぎに行くようになったのであるが、この男性の語りから、当時のサウジアラビアにはソマリ人のエリート層が居住していたことが分かる。そして、この男性はそれらのエリート層に属する人びととともにバーレ政権に反対する活動を始めた。しかし、サウジアラビアではそもそも政党活動が禁止されていた¹⁵⁾。それゆえ、正式にバーレ政権に反対する組織を立ち上げるためにサウジアラビアで話し合いを進めていた人びとはロンドンに派遣団を送ったのである。

サウジアラビアでバーレ政権への反対勢力の形成が模索されていたのと並行して、ロンドンでも1979年頃から反バーレを掲げる組織の立ち上げが模索されていた [Lewis 1994]。上記のように、イギリスには保護領時代から船員が居住していたが、ソマリアが独立して以降は留学のためにイギリスで暮らすソマリ人も出てきた。イギリスには、サウジアラビアと異なり経験のある知識人は少なく、学生などの若者が中心となってバーレに反対する活動が進められ、ロンドンでミーティングが行われるようになった [Lewis 1994]。しかし、その活動は一筋縄には進まず、SNMの発足に至るまでに4つのグループが結成されては消えていった [Lewis 1994]。バーレ政権に反対する活動を進める際の問題はイギリスに居住する元船員たちの下記のような立場や懐疑心であった。

ソマリ人は長老を尊重し、長老が人びとをまとめる役割を担ってきた [Lewis 1961]。聞き取りをした男性は、筆者がSNMにおける長老の役割について質問した際、次のように話した。

ソマリ人社会、ソマリランドで長老とは、一定の年齢で思慮深い人たちのことです。当時ここでは、船員たちがサウジアラビアや他の国から来た人びとよりも年長でしたので、彼らは尊重される立場にありました。

当時、イギリスでは元船員は長老と認識されており、彼らを活動に巻き込むことが極めて重要であった。しかし、元船員はパスポート問題によりソマリア大使館に安易に反対を掲げられ

14) ここで男性はSNMをソマリランド国民運動 (Somaliland National Movement) と述べているが、正しくはソマリ国民運動である。

15) また、サウジアラビアが実質的に支援していたアラブ連盟のメンバーでもあったソマリアの政権をサウジアラビアに居住しながら批判することはできなかった [Lewis 1994]。

なかった。若者たちが元船員をバーレ政権に反対する活動に参画させようとしていたのに対し、ソマリア大使館は元船員に対してパスポートの更新料金を71ポンドに値上げすると通知した。この金額は元船員にとって大金であり、パスポートなしでは働くこともできなくなるため、元船員たちはソマリア大使館と敵対することを回避したかった [Lewis 1994]。また、元船員たちのなかには、バーレ政権に反対する若者たちの本当の目的は政治難民としてイギリスに庇護申請することなのではないかと疑う者もいた [Lewis 1994]。そのため、イギリスではソマリ人をまとめる役割を担い、尊重される長老として認識される元船員をバーレ政権への反対活動に取り込むことが非常に困難であった。

サウジアラビアにしるイギリスにしる、そこに居住していたソマリ人たちはバーレ政権に反対する組織を立ち上げるためにソマリアを出国したのではなく、彼らの出身地であるソマリア北部の状況が悪化したことに対して活動を始めるようになった。とりわけ、男性が述べたように1978年にエチオピアとのオガデン戦争に敗れたバーレは、オガデン地域から逃れてきた人びとにソマリア北部の土地を提供した。オガデン難民は国際社会からの支援対象にもなったのに対し、その土地から追い出された人びとには何の補償も提供されなかったため、彼らの不満は増大した [Bradbury 2008]。サウジアラビアとイギリスにいたソマリ人たちは、この状況に対応しようとバーレ政権に反対する組織の立ち上げを目指すようになったのである。

また、これまで見てきたように、サウジアラビアとイギリスの環境はソマリ人の行動に影響を与えている。男性が述べたように、サウジアラビアでは既に年配で経験のあるエリート層が話し合いをするようになったが、そこでは政治活動が禁止されていたため、政治的組織を発足させることはできなかった。これに対して、イギリスでは政治活動を行うことは可能であったが、当時のイギリスにはサウジアラビアにいたような様々な経験を有するソマリ人男性エリートが不在であり、学生などの若者がロンドンで活動を始めた。サウジアラビアでもロンドンでも、それぞれ個人がソマリアでのバーレ政権による抑圧的な政治体制を受け、反対勢力を作ろうとしたことは同じであるが、その展開の仕方は居住国の環境から影響を受けていた。やはり、彼らの活動は、居住地および出身国の文脈と切り離して考えることはできない。

他方で、サウジアラビアでもロンドンでも、反対勢力を作ろうとした人びとは世代や経験の違いはあったが、世俗教育の経験を持つ人びとであった。これに対し、上記のようにイギリスの元船員のようにソマリア大使館との繋がりを意識せざるを得ない人びとは、バーレ政権と敵対することは回避したく、さらに若者たちの目的に懐疑的な反応を示していた。彼らは皆が抑圧の対象とされたイサックに属していたが、バーレ政権への反応は異なっていたのである。

SNM に対する人びとの支持

イギリスでは人びとの間でバーレ政権への態度をめぐる相違が生じていた。若者にしる、元

船員にしる、彼らは皆がイサクであったが、それだけを理由に人びとが自然と一致団結していたのではなかったのである。Lewis [1994] は、元船員らによる若者活動家への不信感が払拭されたことについて、元船員のある男性が他の元船員らに対して若者活動家たちの目的はイギリスで庇護申請をすることではないと説得したことを述べている。しかし、元船員を説得した男性の背景は彼自身も元船員であったこと以外は示されておらず、どこまでその男性の説得に力があつたのかについて疑問が残る。

ここで着目すべきは、ロンドンで若者たちがバーレ政権に反対する活動を始めた時、ソマリ人の中ではクランの影響力が少なくなっていたことである。Griffiths [1999] によると、イギリスにソマリ人が増加する以前、ソマリ人の古くからの居住地域であるロンドン東部の行政区タワームレットではクランの存在は当然のものとして認識されつつもその影響力を減少させていた。しかし、紛争により人びとはクラン関係を再活性化させたと Griffiths [1999] は論じている¹⁶⁾。この議論を踏まえると、元船員らは自らの出身地域でのバーレ政権の行動を受け、バーレ政権への反対を掲げ、自らと同じクランに属する若者らが行うバーレ政権に反対する活動を支持するようになったと考えられる。

実際に、1980年代初頭以降、ソマリア北部ではバーレ政権による抑圧的な対応が顕著になっており、死傷者も生じるようになった。ソマリア北部の町であり、ソマリランド独立後は首都となったハルゲイサでは、1980年代初頭からバーレ政権に反対する活動が行われるようになり、バーレ政権を批判する新聞も発行された。この新聞を発行したメンバーの数人は1981年1月に逮捕された。このメンバーの裁判が予定されていた1981年2月20日に、ハルゲイサでは学生が石を投げて抵抗を示した。これに対し、バーレ政権は弾薬の使用を含めて軍事力で対抗したため、死傷者が発生し、218人の学生が逮捕された [Bradbury 2008]。ソマリランドでは2月20日は *Dhagax-Tuur* (ソマリ語で「石投げ」の意味) の日として記念されており、筆者がロンドンで調査をしていた際もこの日を記念するためのイベントがロンドンで開催されたことがある。

また、1982年2月24日にはハルゲイサの病院の環境を改善しようとした28人の専門家の逮捕を契機として発生したデモに対し、バーレ政権はデモに参加した学生を殺害し、約200人を逮捕した。この日は北部を出身とするイサクの人びとにとって紛争が始まった日として記憶されている [Bradbury 2008]。バーレ政権は政治経済的に北部地域を周辺化させるのみならず、1980年代に入ると軍事力を用いて人びとへの抑圧を強めていったのである。このように、ソマリア北部でイサクの人びとを対象として軍事力が行使されるようになったことを受け、イ

16) Hopkins [2006] は、2002年から2003年の調査結果をもとに、ロンドンではソマリ人が運営するコミュニティ組織はクランの所属により分裂していると論じている。

ギリスのソマリ人たち、とりわけ元船員らはバーレ政権に反対する行動を支持するようになったと考えられる。

聞き取りをした男性はサウジアラビアで働いたのち、1985年7月にイギリスで庇護申請をしてロンドンで居住するようになり、SNMの中心的な人物として活動した。男性はバーレ政権への抗議活動を取りまとめ、6月と10月に大規模な抗議活動を行ったり、国際機関などにバーレ政権の圧政を訴えたり、活動の資金を集めたりしたという。聞き取りをした男性がロンドンで活動を始めた1985年時点では、すでに元船員たちはソマリアの状況を受けて家族をイギリスに呼び寄せるようになっていたと考えられる。

聞き取りの際、筆者は人びとによるSNMへの支持がどの程度のものであったのかを知るため、男性にSNMのメンバーについて聞いたところ、男性は次のように話した。

私はメンバーの数について言うことはできません。…(中略)…ここでは、全てのイサックは貢献を求められれば、それに応えました。

ここで男性がメンバーの数を答えられないと言うのは、男性がメンバーの人数を覚えていないのではない。男性は当時、メンバーという考え方をしていなかったのである。男性にとってSNMの活動は上意下達とは捉えておらず、だからといってそれは下意上達というものでもなかった。むしろ、SNMは人びとがそれぞれ、できることをしたことで成り立っていたと男性は考えていた。例えば、筆者が大英図書館に保存されているSNMが発行した雑誌を持って男性の聞き取りをしていた際、男性は次のように話した。

このペーパーは偶然発行されたものでした。ここには組織化された印刷業者や編集者はいませんでした。だれかがこのペーパーを編集し、発行したのです。できるときに。

男性はSNMの名で発行された雑誌について、雑誌の発行を担当する組織や人びとがいたわけではなく、編集などを行うことができた人がやっていたと話した。男性にとって、SNMの活動は特定の人物により牽引され、それに人びとが従うという構図では展開していなかったのである。SNMには特定のリーダーがいて、リーダーが特定のメンバーを率いていたのではないと男性は考えている。むしろ、男性にとって、SNMは特定の個人の意向が反映される「誰かの」組織ではなく、その時その時で、できる人ができることをしていたものだったのである。だからこそ、上記のように男性はメンバーの数を答えることができないと話したと考えられる。また、男性はSNMが活動していた当時の人びとの関係については次のように話した。

私はほとんどの人びとを知っていましたし、彼らも私のことを知っていました。私たちはとても小さな国なのです。私たちは互いに知っていました。

男性はソマリランドがイギリスから独立する時に唯一のソマリ人総督であったことから、その名は人びとに知られていたと考えられる。しかし、男性はここで自らの有名性について話しているのではなく、むしろ人びとは互いに知り合いであり、一つの総意を持つまとまりであったことを説明している。男性にとっては、人びとが一体となってSNMを支持し、人びとからの反対は存在していなかったのである。

それゆえ、筆者がソマリランド独立後のことについて、人びとの様子を知ろうと話しを進めていた際、男性はソマリランドの独立が宣言された後にSNM事務局を引き継ぐかたちで発足した「在英ソマリランド大使館」の代表に就任した時のことを次のようにも話した。

それは集団的なものでした。ずっとそうでした。私は「在英ソマリランド大使館」の代表でした。しかし、それは私が皆をコントロールしていたことを意味していません。これが私が覚えていることです。あなたが他にも質問があれば、私は喜んで答えます。あなたは、私たちが持っていた考え方と違うところから始めているから。

SNMの中心的な人物であった男性からすると、当時、ロンドンにいたソマリ人にはまとまりがあり、一枚岩のように行動していたということである。だからこそ、男性は「在英ソマリランド大使館」の代表に就任しても、それは男性が人びとに何かを指示していたのではないと話した。また、この語りでは、聞き取りをしている際に、筆者が男性に対して「誰が何をしたのか」という問いを投げかけていた結果、「あなたは私たちが持っていた考え方と違う考え方から話をしている」とも話した。男性にとってSNMは特定の個人が何かを指示し、それに人びとが従っていた活動ではなく、あくまでもできることをできる人が行い、人びとの総意によって展開されたものであった。男性によるこの認識は、バーレがソマリランド北部に軍事力を行使したことに対し、イギリスに居住していた元船員を含めた人びとが反バーレを掲げる活動を支持するようになった状況が生じたことによるものと考えられる。SNMは、政治活動が許されていたイギリスの環境に加え、ソマリアでの抑圧的な政治体制が悪化したため、人びとの支持を得ながら、そして人びとにより動かされながら展開していった側面があったと言える。

おわりに

本稿は男性への聞き取り結果をもとに、SNMの活動を牽引してきた人物の背景および活動に至った経緯、さらにSNMが人びとに支持されるようになった環境を考察した。この男性は

当時、非常に限定的であった世俗教育の経験を有し、バーレ政権の政治体制に反対して職を辞し、サウジアラビアに職を求めてソマリアを出国した。この時点で男性はバーレ政権に反対する勢力の形成を目指していなかったが、オガデン戦争後に生じたソマリア北部地域でのバーレ政権による抑圧的な状況を受け、反バーレ勢力の形成を目指すようになった。しかし、サウジアラビアでは政治活動が禁止されていたため、サウジアラビアで話し合いを進めてきた人びとは政治活動が許されてきたロンドンに派遣団を送り、合流することで1981年4月にSNMを発足させた。

イギリスではサウジアラビアとは異なり、学生などの若者が中心となってバーレ政権に反対するための活動が始められたが、活動を開始した当初は元船員たちからの支持を得られなかった。元船員らは同じクランに属する若者たちの活動を懐疑的に捉えていた。しかし、ソマリア北部の状況が悪化したことで、元船員たちはバーレ政権に反対する活動を支持するようになったと考えられる。SNMは、人びとの出身地であるソマリア北部の状況とそれぞれの居住地の環境の双方から影響を受けながら活動を展開していったのである。

その後、SNMはソマリア北部情勢の悪化に対する働きかけを強めるためにエチオピアに本部を置いた。1988年からはエチオピアからソマリア北部を本部として軍事活動を行い、バーレ政権との紛争を全面的に開始した¹⁷⁾。この紛争により、SNMは1991年にソマリア北部地域からバーレ政権勢力を駆逐し、その後、ソマリランドの独立を宣言するに至った。

ただし、SNMはバーレ政権に反対する勢力として活動を始めたのであるが、その目的はソマリア北部地域の独立ではなかった。SNMの名に示されているように、あくまでも「ソマリ国民運動」だったのであり、ソマリランド独立を目指すものではなかった。この名前の理由について筆者が尋ねると、男性は次のように話した。

その時、私たちはソマリランド…ソマリアを去ることについて合意がなかったからです。

SNMが1981年10月に発表したマニフェストでは、バーレがクラン主義 (clanism) に陥り、ソマリ人社会を破壊していることを非難し、近代国家とソマリ人の伝統を結び付けた国家構想が提唱された。そこでは、ソマリアとしての統一国家の再生について述べられているが、ソマリランドの独立については述べられていない。マニフェストには、強制ではなく協力による統治としてクラン関係に基づく民主主義や平等主義を基盤とする統治方法が提示され、ソマ

17) この紛争で、1988年時点で約50万人がエチオピアへ逃れ、5万人から6万人が犠牲になった [Bradbury 2008; Africa Watch Committee 1990]。当時の紛争被害については Africa Watch Committee [1990] が詳しい。

リアを5つから6つの地域に分けることや、三権分立などが記載された [Bradbury 2008; Lewis 1994]。

それにもかかわらず、SNMがソマリランドとしての独立を宣言せざるを得なくなったのは、1990年8月にバーレ政権を打倒するためにエチオピアで協力関係を結んだUSC (United Somali Congress: 統一ソマリ議会) のアリ・マハディが、モガディシオからバーレ勢力を駆逐した2日後に、SNMへの相談なしに一方的にソマリアの大統領を名乗ったためである¹⁸⁾ [Lewis 1994]。それゆえ、SNMはソマリランドとしての独立を準備する間もなく、ソマリランドの独立を宣言し、国家運営を行うことになったのである。そして、筆者が聞き取りをした男性はSNMの事務局を引き継ぐ形で「在英ソマリランド大使館」の代表となった。SNMの展開、そしてソマリランドの独立宣言に至るまで、人びとは取り巻く環境に対応してきた。それは原初主義的に人びとがクランの利益追求をプロアクティブに設定し、対立を生み出してきたのではなく、むしろそれぞれの状況にリアクティブに応じてきた結果に過ぎない。

冒頭で述べたように、出身国を離れて他国に居住する人びとは重要な政治的アクターである。しかし、彼らは根無し草のような個人やグループ、ネットワークではなく、出身国や居住国の環境に埋め込まれており、それにより人びとは政治的なアクターになっていく。人びとはいかなる状況からも無関係で、影響を受けない確固たる政治的目的を持つ一枚岩のグループではない。人びとを取り巻く環境やそれへの対応に着目することで、そもそも人びとはどこの、何のディアスポラになっていくのかを考察したうえで、その影響力を論じることが可能になるのである。

18) 当時、ソマリアには複数の武装勢力があり、SNMはUSCとSPM (Somali Patriotic Movement) と協力関係を結んでバーレ政権と戦っていた。なお、Bradbury [2008] は、SNMはソマリアからの独立を目指していなかったものの、1988年に紛争が激化してからは人びとの間で草の根的に独立が求められるようになったと論じている。また、紛争こそが国家形成を導くという点に着目してSNMを分析したBalthasar [2017] は、SNMによる紛争そのものがソマリランド国家の発足に繋がったと論じている。

参考文献

<日本語文献>

- 高松香奈 [2022] 「ミャンマー・ディアスポラと政治的活動—日本における世論形成—」『国際開発研究』第31巻第1号, 19-33頁。
- 能勢美紀 [2022] 「クルド・ナショナリズム揺籃の地としてのスウェーデン—二つの社会制度と民族性の承認」『IDE スクエア』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 1-7頁。

<外国語文献>

- Africa Watch Committee [1990] *Somalia : A Government at War with its Own People: Testimonies about the Killing and the Conflict in the North*, New York: The Africa Watch Committee.
- Balthasar, Dominik [2017] "State-making at Gunpoint: The Role of Violent Conflict in Somaliland's March to Statehood," *Civil Wars*, 19(1): 65-86.
- Bradbury, Mark [2008] *Becoming Somaliland*, London: Progressio.
- Brubaker, Rogers [2005] "The 'diaspora' diaspora," *Ethnic and Racial Studies*, 28(1): 1-19.
- Fagioli-Ndlovu, Monica [2015] *Somalis in Europe*, INTERACT RR 2015/12. European University Institute.
- Griffiths, David [1999] *Somali and Kurdish Refugees in London: Diaspora, Identity and Power*, A thesis submitted in fulfilment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy, University of Warwick.
- Hammond, Laura [2011] "Obliged to Give: Remittances and the Maintenance of Transnational Networks Between Somalis at Home and Abroad," *Bildhaan: An International Journal of Somali Studies*, 10(11): 125-151.
- [2013] "Somali Transnational Activism and Integration in the UK: Mutually Supporting Strategies," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 39(6): 1001-1017.
- Hansen, Peter [2007] "Revolving Returnees in Somaliland," In *Living Across Worlds: Diaspora, Development and Transnational Engagement*, edited by Sørensen, Ninna N., Geneva: IOM, 129-150.
- Hopkins, Gail [2006] "Somali Community Organizations in London and Toronto: Collaboration and Effectiveness," *Journal of Refugee Studies*, 19(3): 361-380.
- Horst, Cindy [2004] *Money and Mobility: Transnational Livelihood Strategies of the Somali Diaspora*, Geneva: Global Commission on International Migration.
- [2008] "The Transnational Political Engagements of Refugees: Remittance Sending Practices amongst Somalis in Norway," *Conflict, Security & Development*, 8(3): 317-339.
- Kleist, Nauja and Masud Abdi [2021] *Global Connections: Somali Diaspora Practices and their Effects*, Rift Valley Institute.
- Koinova, Maria [2018] "Diaspora Mobilization for Conflict and Post-conflict Reconstruction: Contextual and Comparative Dimensions," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 44(8): 1251-1269.
- Lewis, Ioan Myrddin [1961] *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*, Oxford: Oxford University Press.
- [1994] *Blood and Bone: the Call of Kinship in Somali Society*, Lawrenceville, NJ.: Red Sea Press.
- [2002] *A Modern History of the Somali: Nation and State in the Horn of Africa*, Oxford: James Currey.
- Lindley, Anna [2009a] "Between 'Dirty Money' and 'Development Capital': Somali Money Transfer Infrastructure Under Global Scrutiny," *African Affairs*, 108 (433): 519-539.
- [2009b] "The Early Morning Phonecall: Remittances from a Refugee Diaspora Perspective,"

- Journal of Ethnic and Migration Studies*, 35(8): 1315-1334.
- Millman, Brock [2014] *British Somaliland: An Administrative History, 1920-1960*, London and New York: Routledge.
- Prunier, Gérard [2021] *The Country That Does Not Exist: A History of Somaliland*, London: Hurst & Company.
- Rock, Anna Ida R. [2021] “Statebuilding through Diaspora Recruitment? The Role of Capacity, Norms and Representation for Legitimacy in Somaliland and Liberia,” *Digital Comprehensive Summaries of Uppsala Dissertations from the Faculty of Social Sciences 182*, Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Smith, Hazel and Paul Stares [2007] *Diasporas in Conflict: Peace-makers or Peace-wreckers?*, Tokyo: UNU Press.
- UNDP [2009] *Somalia's Missing Million: The Somali Diaspora and Its Role In Development*, UNDP.
- [2011] *Cash and Compassion: The Role of the Somali Diaspora in Relief, Development and Peace-Building*, Nairobi: UNDP.

<ウェブサイト>

IOM MIDA Somalia <https://midasom.iom.int/> (最終アクセス：2023年3月14日)

